

BIWAKO BIENNALE 2007

風土—Genius Loci

BIWAKO ビエンナーレ 2007 “風土—Genius Loci”

BIWAKO ビエンナーレについて

2001年に産声を挙げたBIWAKO ビエンナーレ、2004年に2度目を、そして2007年、3度目を無事終了することができました。ビエンナーレといいながら3年に一度、その実トリエンナーレになってしまっているのですが…。

21世紀の幕開けとともに新潟妻有トリエンナーレや横浜トリエンナーレなどが華々しく開催され、その後も日本各地で、ビエンナーレ、トリエンナーレという地域に密着した形での芸術祭が開くようになりました。しかし、その多くが行政や市民団体が核となっているのに対し、名前こそそのひとつのような印象ですが、BIWAKO ビエンナーレは、一個人の思いが募っての開催という点では全く違うかと思えます。

BIWAKO ビエンナーレは、海外生活が人生の半分以上になるという私個人の体験が元になっています。帰国する度に急激な変貌を遂げる日本、そして故郷、その有り方は本当に日本がなりたかった姿なのだろうか、考え込まざるを得ませんでした。そしてそれとは逆に、現在住んで10年以上になるフランスやその他ヨーロッパの多くの町が、頑ななまでに古い町並みを守ろうとする姿勢、精神性には、心打たれると同時に多くの示唆を得たと思えます。

何にも増して私を憂えさせたのは“風土”の喪失です。日本にもヨーロッパのようにその土地にしか吹かない風“風土”があったはずですが。しかし駅前はおしなべて大型スーパーが建ち、国道沿いは日本全国津々浦々どこも同じようなチェーン店のけばけばしいネオンサインが横行しています。いったい日本の“風土”はどこにいつてしまったのでしょうか？時代を経た堂々とした建物を失うと同時に、いつの間にか日本は、安っぽい張りぼての建物のみが軒を連ねる、まさしく100円均一国家に成り下がってしまったのではないのでしょうか？そうした発展という名の下に無計画あるいは無節操に増え続ける建築群はさらに50年後にはどうなっていくのでしょうか？50年を待たずして粗大ゴミとなっていく運命にあるのではないのでしょうか。100年、いや1000年を経てもなお、その美しい町並みを守り続けていくであろうヨーロッパとの違いを思うと暗澹たる気持ちにならざるを得ません。それはむしろ町に芸術や文化が自然に溶け込んでいる日常の状況の違いにあるかもしれません。建物だけがすばらしくてもそこに住む人々が生き生きと生活していなければ意味がありませんから。確実に人々の精神性というのは街に反映するものだとすることを忘れてはならないと思えます。とすれば、現在の日本の貧困な街の様相はそのまま心の現われなのでしょう。かつての日本の美意識はどこに置き去りにされてしまったのでしょうか？そしていったい日本は今、どこに向かおうとしているのでしょうか？そうしたさまざまな思いが集積し、とにかく何かできることをと暗中模索した結果、故郷で始めた活動がBIWAKO ビエンナーレでした。

1回目は滋賀県大津市で、びわこホールロビー及びその周辺の公園を使つての開催。故郷にオペラバステューにも引けを取らないりっぱなホールができたことに感激し、約1000㎡ある巨大なロビー空間にアーティストたちの作品を展示し、公共の場におけるアートの有り方を提案させていただきました。これがきっかけとなり、それまでは使われることのなかったロビーが、展示やパフォーマンスなど、さまざまな形で活用されるようになりました。

2度目の2004年からは場所を近江八幡に移し、旧市街に点在する空き家を会場に開催することになりました。3度目2007年もここで開催し、今後も活動拠点にしたいと思っています。近江八幡は豊臣秀次によって造られた情緒ある城下町です。お城こそ消失しているものの、碁盤の目状の町は変わらず、魚屋町、鉄砲町、馬喰町など当時そのままの名前が今も使われています。

2002年初めてこの町を訪れたとき、所々駐車場や、新しい建物にはなつてはいるものの、まだまだ色濃く残る昔のしつとりと落ち着いた風情に子供の頃の思い出深い情景が重なり、懐かしさでいっぱいになりました。こうした美しい場所がまだ日本にも、しかも故郷滋賀にあったのだ、とうれしく思うと同時に、これ以上貴重な建物を壊さず、今あるものはなんとか残していつて欲しい、という思いに駆られたのでした。町を歩いていると空き家となっている町家はすぐにわかります。それらは外側から見てもりっぱなものであることが窺えますが、長く放置されているために傷みの激しいものがほとんどで、商業都市として栄えた華やかかりし往時を偲ぶと、そのさみしい佇まいに胸詰まる思いがしました。そして、そうした頃に戻ることはできなくても、また違った形で、この町家たちが生き返ったらと願わずにいられませんでした。

商業で栄華を誇つた町として似ているベニス、ビエンナーレ発祥の地としても有名ですが、商業都市としての終焉を迎え、その復興をアートに置くこと、また古い建物を決して壊さないことによって、みごとに世界の観光地へと転換を果たした点で見習うべきことが多いように思えます。

そうしたさまざまな思いを胸に、誰ひとりとして知る人のいない近江八幡を奔走。月日の経つ中、少しずつ賛同してくださる方も増え、2年近くを経てなんとか開催に漕ぎ着けたのでした。また2005年には、BIWAKO ビエンナーレのみならず、常に地元で密着した活動をしていこうとNPO法人エナジーフィールドを立ち上げました。

そして2007年、前回に引き続き近江八幡での開催が実現しました。3回のビエンナーレの間になんと多くの方々にお世話になったことでしょう。情熱だけを頼りに突っ走る私を脇で支えてくださる方々の存在なしには、決してなし得なかったプロジェクトです。そしてその結果は、関わってくださった方々の努力の結晶です。会期間中のみならず、いや、むしろ、そこまでに到るプロセスの

中にこそ BIWAKO ビエンナーレの意義があるとさえいえるかもしれません。常々プロジェクト全体が作品であると申ししておりますが、目にはつかないプロセスにこそ BIWAKO ビエンナーレの醍醐味はあると思います。素晴らしい結果はその地道な営みなしには決して生まれ得ないからです。

BIWAKO ビエンナーレ 2007“ 風土—Genius Loci”

さて、今回の BIWAKO ビエンナーレ 2007 は、そのタイトルも“風土—Genius Loci”とし、アーティストたちは、近江八幡という土地そのものとのコラボレーションに臨みました。町や建物に潜む目に見えない気配、木々や、風、水の精霊たちのひそやかな声に耳を傾けてみようという試みが、今回の BIWAKO ビエンナーレです。

主な展示会場として、使われていない古い建物を使用しましたが、現在営業中のカフェなどにも作品を置かせていただきました。

旧市街に点在する会場はそれぞれ歩いて2分～10分という立地。すなわち、気持ちよく町を散歩しながら、それらを見て回ることのできる距離です。会場巡りが、観光では足を踏み入れることのない、碁盤の目になった旧市街に自ずと誘われるという結果になります。地元の人たちでさえ気が付かなかった新たな発見がそこにはあります。車社会は生活を便利にはしましたが、こうした町散策の楽しみを奪ってしまったのではないのでしょうか。BIWAKO ビエンナーレでは、近江八幡の町をゆつたりと巡ることで、それぞれ自分自身の時間の流れを取り戻して欲しいとも考えました。また今回の会期は晩夏から秋そして初冬へと季節を跨ぐものとなり、緑なす蔦や木々の葉が日ごと色を変えていくさま、高い位置にあった太陽が傾きを増し、落ちる影を長くしていくさま、日本の美しい季節の機微を感じさせてくれる50日間となりました。その間、晴れの日あり、雨の日あり、その日その日で、作品は違った表情に見えます。また一日のうちにも朝と夕では、その陰影は変化し、そのときどきでの感動を与えてくれるのでした。

実に、アートは日常の風景を一変させる力を持っているのだと思わずにはいられません。アートが介在することにより、町全体も一層輝きを増すようです。普段見過ごしている何気ない場所や空間が作品によって饒舌に語りはじめるさまこそが、こうしたプロジェクトの一番の醍醐味かとも思います。作品自体その空間なしには成立しない、またその空間があるがゆえに意味を持つ、そこにホワイトキューブでは実現不可能な関係性が生まれます。古い建物の中で観客は作品に対峙するのではなく、むしろ作品と一体化するという体験をします。空間そのものが作品となっているこうしたプロジェクトにおいては、観客自身も作品の一部となる役割を担うと言ってもいいかもしれません。住み手を失い、長い眠りについていた空間そのものも作家達の手により、また観客達により、以前の凜とした尊厳を取り戻していきます。

幾多の生と死の錯綜が濃密に漂う空間は、その静けさゆえにより一層作家たちの胸の奥深くを泡立たせ、やがて作品となって昇華していきました。今回展示された作品の多くは新たに制作されたものですが、たとえ、過去に制作されたものであったとしても、そうした空間の秘められた力によって以前とは全く違った様相を呈し、新たな生を謳歌し始めるのでした。

BIWAKO ビエンナーレでは、あまり難解でコンセプチュアルな作品は展示されていません。むしろ直接魂に語りかけてくる無条件の感動を呼び覚ますものを、と心掛けています。“考える葦”である人間は思考の呪縛から逃れることはできないでしょうが、純粹に、言葉には成し得ない感動を心で感じとることもできるはずです。それは、意図して生まれきた人間などひとりとしておらず、唯一平等に与えられた“死”というその瞬間が訪れるまで生きることを余儀なくされる理不尽な存在としての自己の探求、また、どれほど悠久のときが流れようとも、決して解明され得ない生命の不思議さに対する畏敬の念にも通じるものかもしれません。人生の中で、人はいったい幾度、魂に響く珠玉の瞬間に出会うことができるでしょう。慌ただしく過ぎ去る日々の中、ふと立ち止まるときに、BIWAKO ビエンナーレでの感動の体験が、各々の心の中でほんのりと光を放つ、そうしたひそやかな、しかし忘れ得ないものひとつになって欲しいと願っています。

今後も、琵琶湖という日本の母なる湖に敬意を表し、そこに吹く風を感じながら、こうした活動を謙虚に続けて参りたいと思っています。BIWAKO ビエンナーレが、日常の中で人々が見過ごしがちな、ささやかだけれど大切な何かを思い起こしていただくきっかけになれば幸いに存じます。

最後になりましたが、BIWAKO ビエンナーレをともに遂行してくださった作家の皆様、活動を影で支えて下さったスポンサー様、スタッフの皆様、そしてこうしたプロジェクトを開催する機会を提供してくださいました近江八幡市の方々に心よりお礼申し上げます。

喜多利邸

Kitari tei





竹田直樹
NAOKI TAKEDA

人は、人生に成功すると庭を作ることがあります。

たとえば皇帝や貴族や将軍、成功した商人の中には、大きな庭を作った人が大勢います。

自然の一要素である人間が、その自然を再構成して理想のものとするのが庭であり、

それは人の究極の欲望が果たされた結果なのです。

それでは、現代の私たちの欲望とはどのようなものなのでしょう？

私は、かつての近江商人の欲望の痕跡が今なお色濃く残る喜多利邸の古い荒れ果てた庭に、

現代の欲望を少し追加してみます。



BIWAKO ビエンナーレ 2007—風土—Genius Loci

総合ディレクター 中田洋子

事務局長 出口登志恵

総合マネージメント 前岡義人

マネージメント MATSUDA EIICHI

広報チーム 伊藤朱美、疋田怜史、加藤エリカ、丸山晶

デザインチーム 細川夏樹、小林知寛、川口大介、大西博幸

グッズチーム 三上貴恵、鈴木百合香、杉本早紀、北川文

マップチーム 森朋浩、奥井有里恵、中島拓哉

カフェチーム 藤和津代、尾田夕季、中舎萌、一宮明菜、西嶋佳代、馬場泰幸

カタログチーム 岡田志帆子、田中美保

アニメーションチーム 藤田寿弥子、井上知美、西浦希里、森哲也、田村和子、村尾真希、岩戸麻喜、辻典子、西田明日香、山岸正英、鈴木恵理子、中村多恵、宮内映里奈、澤田悠奈、森香織、田中活彦、糸数征哲、牧野沙由利

みずうみのはなワークショップ 山本彩、宗像晶子、山田稔子、小本佳美、刀根和也、武岡俊成

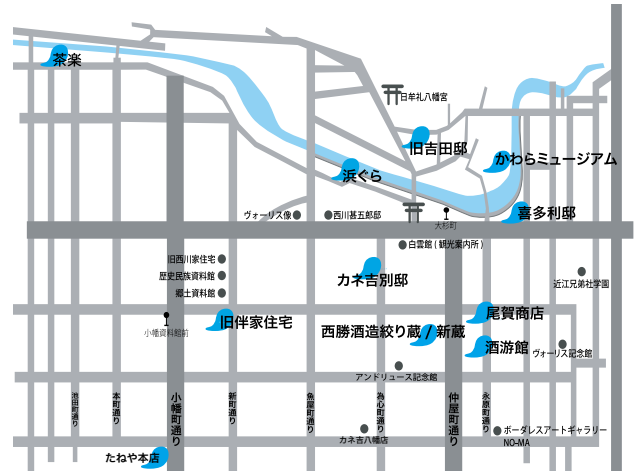
よーじ手芸プロジェクト 今村紘子、北川明寿香、公庄梓、久保遥、高橋紀子、武田梨沙、田中麻央、西村有貴、沼田育美、久本里美、松岡民恵、山元麻衣、山口まなみ

八幡小学校図書室整備プロジェクト 貴志真生也、柴田景子、柿山祐人、木村衣里、辻典子、水無瀬翔

翻訳 大山恵子、ティモシー・ダルトン、岡崎藍、竹上紘平

映像記録 野澤克之

その他 赤毛勇、浅岡徹夫、東ユキヤス、荒川昭男、安藤早美、石井利夫、石田峰洋、乾佐知子、居松悦津子、居松保雄、上坂旭絵、梅次洋子、浦谷美豊、太田いつき、大西可奈子、大西實、大野文隆、岡田和宏、岡田光幸、岡村春香、岡本里栄、奥村恭代、角谷和香、かとうひろみ、金子真梨子、川口愛美、川崎佳代、菊田陽子、岸田美香、北村彩香、北川直子、清原みどり、黒田愛子、小関皆乎、小宮さおり、斎藤等、坂上慎也、佐々木梢、澤井健志、塩川和宏、白井いと江、白井貞男、白井佳江、白倉純子、高木あかり、高木健二、田尻恭子、立石麗奈、田中ゆう子、田辺真理、田村智子、ドゥニーズ・ブワソナード、外崎佑実、中江洋二郎、中田壮樹、中田明夢、夏原美和子、並河哲次、西野貴子、ニコラ・ボードゥ、野鳥絹代、野鳥助四郎、橋野絵美、橋本悦子、浜村友基、林勇、林志津子、樋口菜緒、平野泰子、広瀬佑子、深田育代、藤田智丈、藤原崇、文長治、松吉ひとみ、三浦伊代子、御子柴泰子、南吉美、宮尾芳昭、宮下美美子、村西耕爾、村山奈穂、森本麻里、諸頭千草、山田愛、山田須美子、山田真由美、藪薫彦、山城園、山城優摩、山本進三、吉川尚範、吉田真理、米本聡子、米本晴



主催 NPO 法人エナジーフィールド

共催 近江八幡市

協賛 (有)アイアンドティ、オムロン(株)、(財)花王芸術科学財団、(財)河本文教福祉振興会、(株)京都銀行、関西美術印刷(株)、(株)JJF、滋賀ダイハツ販売(株)、宝ホールディングス(株)、(有)フェイム、村田機械(株)、(株)ワコール、MAV (multicultural Arts Australia)、Kultour、Australia Council for the Arts、玄術 宗久

後援 近江八幡商工会議所、(社)近江八幡観光物産協会、滋賀県、滋賀県教育委員会、(財)滋賀県国際協会、(財)滋賀県文化振興事業団、(社)びわこビジターズビューロー

協力 (株)井上組、近江八幡金融協議会、尾賀商店、(株)カネ吉ヤマモトフーズ、酒遊館、西勝酒造(株)、たねや本店、ティースペース茶楽、浜ぐら、すゐ製作所、兵庫県立淡路景観園芸学校竹田ゼミ、林工務店、(株)藤田

認定 (社)企業メセナ協議会

OMRON

京都銀行

muratec

滋賀ダイハツ販売株式会社

Takara

Wacoal

M. Achnal

kultour

arts victoria inc.

National Commission on the Arts and the Humanities

印刷・製本：関西美術印刷(株)

撮影：平垣内悠人、竹田直樹(6-7 ページ)、小池晃(16-17 ページ)、津田直(54-55 ページ)、大船真言(59 ページ一部)、他

デザイン：岡田志帆子

NPO 法人エナジーフィールド

BIWAKO ビエンナーレ 2007 事務局

〒523-0831 滋賀県近江八幡市玉屋町 6 番地

TEL&FAX：0748-26-4398